

地域に残る史跡や昔から受け継がれてきた文化の意味や経緯を知る人は、時代と共に少なくなっています。

当時の人たちはどのような想いで史跡、文化を守り、遺してきたのか。きっとその想いは、何物にも代え難い、尊いものでしょう。未来へ歴史を、そして文化を繋ぐ。それが今の私たちに与えられた役目です。

潮騒

CONTENTS

- ◆特集「史跡・文化探訪(後編)」
- ◆表浜むかし話「中田恭一画伯」
- ◆協議会の概要
- ◆表浜風土記「海の声を聴いて」(田原市サーフィン協会)
- ◆平成28年度事業計画



田原市谷ノ口公園(表浜ほうべの森) 里山里海体験会
(最終ページの「表紙写真の紹介」をご覧ください。)

史跡・文化探訪 後編

地域を知るには、まず歴史を知ることから。
 東部太平洋岸地域には、今もなお、多くの史跡や文化が遺されています。
 今回は、前号に続く特集記事(後編)として、
 田原東部校区・六連校区に遺る史跡・文化をご紹介します。

田原東部校区 地域をつなぐ伝統芸能

としまだいなんぶつ 豊島大念仏

8月13日の夕方。涼しげに響く鐘、お祭りを思わせるような小気味良い太鼓の音色が、遠くから風に乗って聞こえてきます。それを合図に、だんだんだんだん、人が集まり、にぎやかになっていきます。

「こんばんは」「相変わらずお元気そうね」

豊島のお盆のはじまりです。



光福寺にて

大念仏踊りは田原市豊島町の地域に受け継がれているお盆の伝統芸能で、昭和40年に田原市無形民俗文化財に指定されました。初盆を迎える家々を巡り、その年に亡くなられた方の霊を念仏で供養し、また余興として、ご家族に楽しんでもらうものです。

渥美半島で広く行われてきた行事でしたが、後継者不足で文化は廃れ、今は、ここ豊島だけになりました。豊島もまた後継者が途絶えて休止していましたが、平成16年に、保存会の方の「豊島の伝統芸能を復活させよう」という熱い想いが地元住民にも届き、見事に復活させることができました。

昔は、多くの家が大念仏踊りを好んで申し込んだので2日間もかかるほどでしたが、復活してからは光福寺・豊島集会所・安原お薬師の3箇所と決めて行うので、13日の夕方だけとなりました。文化は途絶えさせたくない、でも地域の人にもっと親しみを持って参加して欲しい、という思いから現在のやり方へ変わったそうです。

「文化は当時のまま継承する事が全てじゃない。時代に合ったやり方に変える事も大切だよ」と地元の方は笑顔で語ります。

ごぞの上には、色とりどりの花笠を持った子どもたちが8人、大拍子という座りながら大太鼓を叩く高校生が2人、^{しょう}鉦と呼ばれる鐘を鳴らす男の子が2人。他の子どもや大人はごぞの周りを囲み、まずは全員で念仏を唱えます。念仏が終わると場の雰囲気はがらりと変わります。主役は大太鼓と小太鼓を担いだ子どもたち5人。大人のお囃子に合わせて、太鼓を叩きながら、跳んだり回ったり激しく踊ります。身体の静と動のメリハリを表現する^{ぼち}撥は、踊りの中で重要な役割を担っています。踊り手の一番の腕の見せ所であり、洗練された動きで観る者を魅了します。およそ30分間の上演はあっという間に終わりを迎え、豊島の人たちの拍手喝采で幕を閉じます。



豊島集会所にて

この大念仏では、踊りと踊りの間の休憩時間に、お菓子や飲み物の振る舞いがあります。それは、かつて初盆の家々を回る時にあった、お菓子と飲み物のもてなしを受け継いでいます。子どもたちはこれを楽しみにして、なんとか踊り手になりたくて必死に練習をしたそうです。見渡せば、子どもたちはさっきまでの踊りの疲れを忘れて遊び回り、大人たちは酒宴で談笑しています。老若男女、豊島の人みんなが一つの同じ場所に集まり、同じ時間を共有するこの行事は、とても温かいものでした。供養された祖先の方は、地域の人と人との強いつながりを感じて、きっと安らかに眠ることができるでしょう。今はもう途絶えてしまった他の地域で、再び大念仏が盛んに行われる。そんな日が来るのを願うばかりです。



こうべしんいちろう
河邊進一郎さん
豊島大念仏保存会代表

古くから受け継がれてきた豊島大念仏を、いかにして後生につないでいくか。一旦休止する前の大念仏を知る指導者が減り、20代から30代の踊り手がないなど課題は多くあります。それでも10年前には東部小学校から学芸会で踊りたいと申込みがあり、毎年多くの子どもたちが参加してくれます。復活を果たした時、なによりも喜んでくれたのは地元の方たちでした。周りの方の期待を受け、保存会は子どもたちと共に、やりがいをもって取り組んで参りますので、なにとぞご支援をよろしく願いいたします。



いしばしひなた
石橋日向さん
^{えのきざわ}
豊島町榎沢在住
(大太鼓踊り手の1人)

地域の伝統を守る…なんて大層な理由ではなく、純粹にこの行事が楽しくて積極的に参加しています。集会所での練習の賑やかな雰囲気、また夏の夜にみんなで地域を歩いて回るという特別感が好きです。「踊り」で扱う太鼓は重く、やりたいと言ってくれる女の子が少ないです。だから自ら率先して踊り続けることで、これから先を担う女の子に勇気を与えたいし、多くの小学生が大念仏に興味を持つきっかけになれば嬉しいです。踊り終えて、初盆の家の方にありがとうと言われた時は、続けてきてよかったと心から思えた瞬間でした。

ちょうせんじ
長仙寺

田原市六連町にある長仙寺は、「おたがまつり」で有名だ。しかし、「おたがまつり」は江戸時代後期の天保5年(1834年)からはじまったのに対して、長仙寺の歴史はそれよりずっと昔からはじまっている。江戸時代に書かれた寺伝では、行基菩薩ぎょうき ぼさつ(※)によって奈良時代の天平18年(746年)に創建されたと伝えられているが、あくまで寺伝であり、文献学的には、室町時代に、この地に建てられていたようである。

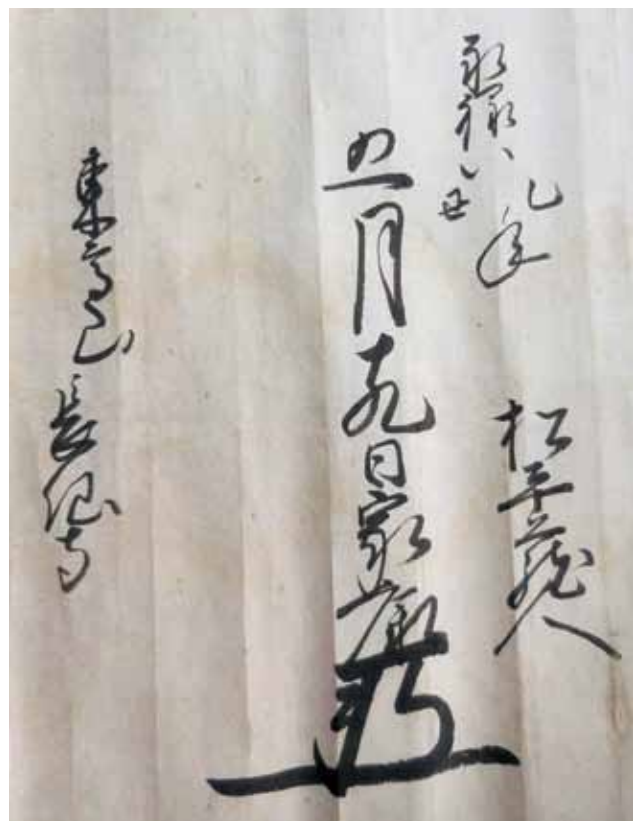


長仙寺境内全景

仏教僧侶は、自分の求める教えや経典を求めて、各地を訪ね歩く。長仙寺は真言宗の僧侶が学ぶ寺だった。長仙寺に残る古典籍の中にも、尾張や遠州や奥三河の寺で書写したり伝授を受けてきたと書かれているものがある。遠くは高野山にまで行って学んできたことが書かれているものもある。江戸時代以前から、多くの僧侶たちがこの渥美半島にまで訪れて学び、逆にこの長仙寺で育った僧侶たちが、津々浦々に仏教を求め広めて活動していた。

こうした僧侶たちが、日々暮らし真言宗の仏教修行を積んでいたのが、現在の長仙寺の本堂だったと思われる。江戸時代のある時期までは、長仙寺の本堂は宝形の建物で、現在のような一般参拝者の便宜ごまいどうを図った造りではなかった。あくまでも僧侶たちの参拝スペースが広く取られていた。また護摩堂も、江戸時代半ばに、現在の豊橋市大崎町にあった大崎城主中島與五郎なかじまよごろうの一寄進によって建てられたと伝えられているが、この護摩堂も、真言宗僧侶が祈祷法を身につけるための修行の場であった。

そんな長仙寺が、江戸時代初期に危機的状況に陥ったことがあり、その時に寺を支えたのが、田原藩であった。なぜ長仙寺を支えたのかということを示す、一枚の古文書が存在している。この古文書は、徳川家康が、田原城攻めに成功した後に、長仙寺に対して当時としては破格の恩賞を与えた文書である。徳川(当時は松平)家康の署名と花押かおうが書かれている。この徳川家康公しやうもんの証文しょうもんがある寺を潰してはならないと、挙母藩から田原藩主になった三宅康勝みやしかつが長仙寺を支えたのである。以後、田原藩の庇護のもと、長仙寺は江戸時代以後も檀家寺としてではなく、僧侶を育てる寺として地域の真言僧侶の教育を担っていったのである。



徳川(松平)家康花押

※行基菩薩…奈良時代の社会事業に尽力した僧。

おたがまつり

毎年3月の第2日曜日に行われている「おたがまつり」の起源は、天保5年(1834年)にまで遡ります。江戸時代後期、賀茂真淵かものまぶちや本居宣長のりながによって古神道の見直しが提唱され、やがて復古神道ブームが訪れます。こうした時流に乗って、天保5年に現在の滋賀県にある多賀大社から「多賀壽命尊たがじゆみようそん」を分神として頂き、長仙寺の阿弥陀堂にまつるようになりました。

そもそも現在の多賀壽命殿は、阿弥陀如来をまつる阿弥陀堂でした。仏教の教えを説くために神に形を変えて説いたとする考え方をしたのが、本地垂迹説ほんちすいじやくせつです。この本地垂迹説に則って阿弥陀如来に符合するのが多賀壽命尊だったわけです。



おたがまつりの賑わい



みこしとぎょう御輿渡御

社の周りにたくさんあります。この丸石は、一方で多くの生まれ得なかった命の象徴でもあるともいわれます。死者の命が、産まれた子供を守ると考えたのです。海から幸(海産物)を頂き、海から流れ着く丸石に守ってもらっていたのが、この六連地区でした。

この海の幸により多く恵まれることを占ったのが、「おたがまつり」で現在も続いている「玉取り」です。往事の玉取りは、網元の若者たちが競って参加したといわれます。長仙寺境内の東に建てられている魚鱗塔きよりんとうには、表浜の多くの網元たちの名前が刻まれています。この網元の若者たちが、金の玉を取らんと境内を駆け回り、奪い合い競い合ったのです。現在は中学生以上の若者なら、誰でも参加できます。海の民の心意気が感じられるお祭りです。

「お伊勢参らば、お多賀へ参れ」と言われるように、古事記のなかでは多賀大社の祭神である「伊邪那岐命いざなぎのみこと・伊邪那美命いざなみのみこと」の子として産まれたのが天照皇大神あまてらすおのみかみでした。この伊邪那岐・伊邪那美の国産み伝説の部分は、本来は瀬戸内海淡路の神話がベースだったといわれます。ですからこの国産み伝説は、海の民のものだったのです。

海の民には、子供が産まると、海から丸石を拾ってくるという習俗があります。長仙寺のある六連町の久美原・浜田・百々・長上にある4つの神社には、子供が産まれたときに海から持ってこられた丸石が



現在の玉取り風景

(寄稿:長仙寺 渡邊 真教住職)

「中田恭一画伯」

山田もと著

恭一少年は、本をよみながら、のろのろ山道をおいていく。畑へいかないとしかられるし、畑へつけば本もよめない。絵もかけない。それで、花がさいっていると花をかく。とんぼがいたら、じっとみていて写生する。畑へつくころは、夕ぐれになっている。

「百姓の子が、本や絵でめしがくえるか。はや畑のしごとをせよ。」

と、おとうさんはいつもおこった。

恭一少年のかやには、50センチほどの、四かくな穴があけてあり、そこから首と手をだして、よなかまで絵をかいていた。カンテラの火を、かやの中へいれるとあぶないからで、ねる時は、その穴を紙でふさいでねた。

恭一は、大草小学校を卒業すると、神戸小学校の先生になった。

「こんやは、とまりばんだよ。」

というて家をでる日が多い。だが、学校のしごとをすますと、豊橋へまっしぐら、絵の勉強だった。

かすりの着物にしまのはかま、げたをはいて、歩いていくのだ。絵をならうと、また歩いて帰る。家へ帰ると夜明けだった。

やがて恭一は東京に出て、小学校の先生をしながら、絵の勉強にはげんだ。

美しい水と空が大すきな恭一は、大正8年、中学の先生になって、三重県伊賀上野へ来て、その美しい水と空の風景をかいた。

昭和2年、大草と号してかいた、波切のとうもろこしと海の絵が、帝展（今の日展）に入選した。つづいて、月が瀬の川と

梅の絵、とば港と、つぎつぎ入選した。

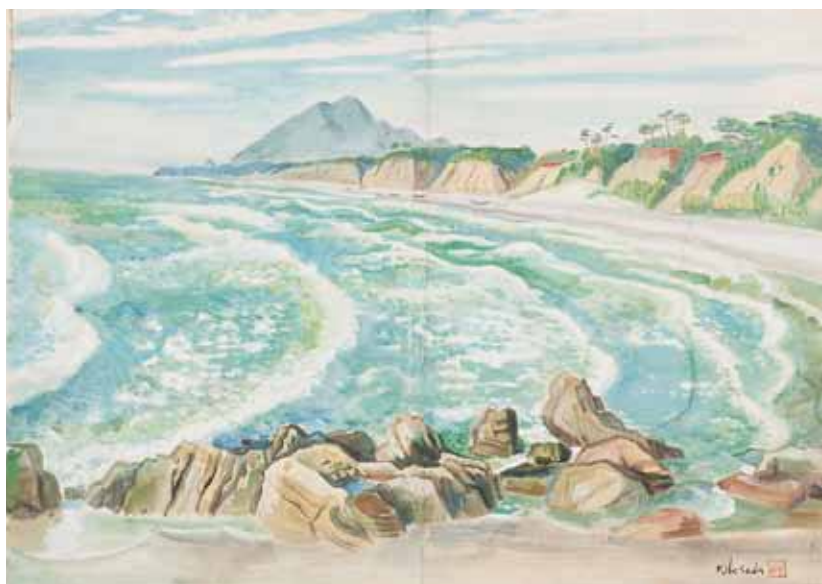
昭和9年、恭一画伯はまた東京へでたが、日本中を歩きまわって、かきたい所にいきあたると、いつまでもここでかきつづけた。中学や女学校の、絵の教科書もかいた。いろいろの展覧会にも入選した。絵でくらしがたつようになったのである。

絵でめしはくえんとはんたいしたおとうさんが、病気になった時、恭一画伯は、毎日手紙をかいては出した。

戦争がはげしくなった19年、恭一画伯は、かぞくをつれて大草にもどった。もう、絵のぐも紙もなくなって、すきな風景はかけなかった。生活のため、戦死者のしょうぞう、かけじく、カーテンに何百枚と同じ絵もかいた。

まもなく体を悪くして、絵がかけなくなり、昭和35年になくなった。

大草画伯が勉強した絵が、今もたくさん残されている。



作品No.1「高松一色」中田恭一作
提供：田原市博物館（所蔵）

【著者紹介】◎1920年 神戸村大草志田生まれ
◎1939年～47年 野田尋常小学校へ勤務
◎1957年 名古屋童話作家協会入会
◎1992年 田原町町政功労者表彰
◎2004年 逝去

創刊号 ● 大漁不動様
第2号 ● 水の乏しかった頃
第3号 ● 一本木の狐
第4号 ● 海亀のお墓

第5号 ● 潮の流れ
第6号 ● 砂場の砂はこび
第7号 ● ほうべの井戸
第8号 ● まちがい

第9号 ● おばあちゃんの井戸塾
第10号 ● 広吉いの大松
第11号 ● 寝祭り
第12号 ● 神の釜と久丸さま

第13号 ● かご池の桜
第14号 ● 出水はどこだ
第15号 ● 三人兄弟と牛
第16号 ● 源五郎さんの山
第17号 ● おそでの山

山田さんは、田原中部小学校のPTA機関紙「家庭と学校」へ1964年から41年間にわたって156もの作品を寄せ、田原に伝わる民話や伝説、田原に縁のある人物の伝記はもちろん、地域の子どもの暮らしぶりを伝え、多くの皆さんに心豊かな安らぎを与えてくださいました。「表浜むかし話」では、山田さんのご逝去後も、その作品を紹介させていただいております。

「みんなで考え・行動する地域づくり」

田原市東部太平洋岸総合整備促進協議会の概要

■会長あいさつ

本協議会は、平成8年の発足以来20年を経過し、神戸・大草・六連・田原東部の4校区が一丸となり、少しずつではありますが、自立した地域活動を歩み進めてまいりました。

平成13年12月に最初の海浜拠点整備地区として「谷ノ口海岸」が選定され、「谷ノ口総合整備促進協議会」の設置、「ええZONEガーデン整備計画」で地元住民と行政との意見・提案等を集約検討しました。

そして、平成16年11月にええZONEマーケット開設、平成17年3月に谷ノ口地区整備基本計画が策定され、体験農園・表浜ほうべの森の整備に着手し、現在も継続整備が実施されています。

協議会全体としても、同じ海岸環境を持つ地域との連携をとりながら、行政と一体となって海岸侵食対策、地震対策等に取り組んでまいりますし、太平洋岸地域の快適で住みよい環境整備が実現できるよう活動していきたいと思っております。

田原市東部太平洋岸総合整備促進協議会 会長 村上 誠

今後の協議会の取り組み

【随時実施予定】

- ・太平洋岸の魅力発信するイベントの開催
- ・海浜・崖森・農地エリアのエリア別の整備促進
- ・渥美半島全体の連絡調整
- ・関係機関への要望活動等の展開

【H28実施予定】

- ・田原市東部太平洋岸地域整備基本計画アクションプランの策定

※太平洋岸地域整備基本構想「サングリーン21」

(平成9年策定)と、田原町太平洋岸地域整備基本計画「表浜自然ふれあいガーデン」(平成10年策定)を理念・骨格とし、主に短中期的な取組を整理するもの。策定にあたっては、社会動向や東部太平洋岸を取り巻く現状・課題、田原市総合計画などを考慮し、実現可能なプランとして再構築する。

■協議会組織 (平成28年10月現在・順不同)

役員	会長	村上誠(田原東部コミュニティ協議会長)
	副会長	西山正一(六連コミュニティ協議会長)、牧野京史(神戸コミュニティ協議会長)、寺田幸弘(大草コミュニティ協議会長)
委員	市議会議員	仲谷弘、赤尾昌昭、河邊正男、大竹正章、彦坂久伸
	漁業関係者	富田實(愛知外海漁業協同組合理事)、太田行彦(愛知外海漁業協同組合網元代表)
	市農業委員	大羽秀敏、大河照治、白井進、木下和洋
	市役所	鈴木正直(副市長)、小川金一(産業振興部長)、山内義晃(建設部長)、太田次男(都市整備部長)、大根義久(教育部長)
顧問	山下政良(田原市長)、山本浩史(愛知県議会議員)、中神享三(愛知みなみ農業協同組合代表理事組合長)	
事務局	田原市役所企画部(企画課)	

●表浜自然ふれあいガーデン 実現に向けてのこれまでの動き

ハード事業

◆海岸整備(県事業)

- ◇海岸保全事業(傾斜護岸)：百々海岸(H19)、離岸堤調査・工事(豊橋田原海岸) ◇海岸治山事業：8箇所要望中

◆拠点地区の整備促進(市事業)

- ◇公衆便所整備事業：谷ノ口海岸(H9)・大草海岸(H10)・百々海岸(H11)・東ヶ谷海岸(H13)
- ◇海岸駐車場事業：大草海岸(H11)・百々海岸(H12)
- ◇道路整備事業：南谷ノ口1号線改良(H15)・寺前上り口線拡張(H16～H18)・高畑谷ノ口線改良(H17)・谷ノ口海岸線拡張(H17～)・R42公民館前交差点改良(H18～)
- ◇公園整備事業：表浜ほうべの森整備(H18～)

ソフト事業

◆表浜自然ふれあいフェスティバル(協議会事業)

- ◇メイン海岸：H10谷ノ口・H11大草・H12百々・H13東ヶ谷・H14大草・H15百々・H16分散開催・H17大草・H18百々・H19東ヶ谷・H20大草・H21百々・H22東ヶ谷・H23大草・H24百々・H25谷ノ口・H26谷ノ口・H27大草

◆表浜のレクリエーション

- ◇健康ウォーキング大会(市教育委員会)：H10東ヶ谷・H11大草・H14谷ノ口・H15百々・H17百々
- ◇ふれあいウォーキング大会(六連青少年健全育成)：H13六連海岸

多額の予算を必要とする海岸保全事業の継続的な実施には、国土保全・防災面に加え、表浜海岸の持つ多面的価値の創造を行い、投資効果の向上を図る必要があります。

●農地エリアの整備 実現に向けてのこれまでの動き

ハード事業

◆農村・農地の整備(市事業)

- ◇農村振興総合整備事業：神戸地区(H12～H16)・大草、高松地区(H18～)・田原東部地区(H19～)
- ◇農用地基盤整備事業：谷新田排水対策(H20～) ◇農地・水・環境保全向上対策(H19～H25)
- ◇多面的機能支払事業(H26～)

ソフト事業

◆農地基盤に関する実態調査(市事業)

- ◇農地基盤再整備に関する調査：H11表浜全域

道路・排水・農地区画・ため池などの農業基盤に加え、集落環境を含め総合的な整備促進を図ります。

表浜風土記

Interview

「海の声聴いて」

田原市サーフィン協会会長・宮田 良さん

田原市サーフィン協会と田原市東部太平洋岸総合整備促進協議会が歩み寄ったきっかけは、表浜ふれあいフェスティバルでした。私たちが一番大切にしていることは「サーファーのイメージ向上」です。住民の方とのトラブルや駐車違反などを未然に防ぐ目的で、フェスティバルでは駐車場整理の担当をしています。フェスティバルは毎年雰囲気が良く、地域の方とふれあったりと、皆さん明るく楽しく取り組まれている印象です。これからもぜひ継続して開催して欲しいです。

また、表浜海岸はありのままの自然が多く、海から見る景色は絶景です。確かに海岸の整備・開発は必要ですが、出来る限り今の形を残したいのが本音です。サーフィンをしていると、まるでそのようにのぞむ海の声が聴こえてくるようです。

今の子どもたちは海であまり遊ばないので、これからビーチクリーン活動などを通して、誰もが安心して遊べる海をつくり、未来の子どもたちに、他のどの地域にも負けない、表浜の美しい自然をつないでいきたいと思います。



サーフィン協会の皆さん



サーフィンの様子

平成28年度事業計画

主要事業

第19回表浜自然ふれあいフェスティバル

日時 ● 平成28年12月3日(土) 午前9時～正午
※悪天候の場合は平成28年12月10日(土)に延期

場所 ● 久美原～大草の表浜一帯
※親睦会場は田原市谷ノ口公園(表浜ほうべの森)

内容 ● 海岸清掃、地引網(予定)、フライングディスクゴルフ、豚汁・石釜ピザなどの無料提供ほか

目的 ● 表浜海岸の魅力、海岸侵食などの現状を広くPRすることで海岸整備の促進を図る

※フェスティバルの内容は、変更になる場合があります。

主な推進事業

農村総合整備事業 田原市産業振興部農政課
[大草・高松地区、田原東部地区]

多面的機能支払事業 田原市産業振興部農政課
[六連・神戸・大草・田原東部各校区]

海岸治山事業 愛知県東三河農林水産事務所

海岸保全対策 愛知県東三河建設事務所

森林公園整備[谷ノ口地区]:田原市都市整備部街づくり推進課

【表紙写真の紹介】里山里海体験会

谷ノ口地区では、地域づくりの一環として、自然とふれあう大切さを楽しく体験できるイベント「里山里海体験会」を開催しています。今年は7月18日(月・祝日)に開催され、表浜ほうべの森では石や貝殻を使った工作教室、谷ノ口海岸では地引網体験、そしてお昼には谷ノ口公園の石釜を使ったピザ作りなど盛りだくさん。多くの参加者で賑わい、集合写真からは地域のつながりや仲の良さを感じられます。

★表浜情報誌「潮騒」や「協議会活動」に対するご意見・ご要望・ご感想をお寄せください。

【発行】田原市東部太平洋岸総合整備促進協議会(事務局:田原市役所企画部企画課) 〒441-3492 愛知県田原市田原町南番場30-1 TEL0531-23-3507

この冊子は再生紙を使用しています。

第18回 表浜自然ふれあいフェスティバル

昨年開催

H27
11.28
開催



快晴の青空の下、開催された第18回表浜ふれあいフェスティバル。約1,500人の参加者により、久美原海岸～大草海岸までの一帯で海岸清掃を実施し、2トントラック1台分もの量のごみを拾い集めることができました。

親睦会場となった大草海岸では、初開催のビーチサンダル(靴)飛ばし大会が盛り上がったほか、各校区の方々が作った地元自慢の特産鍋が振る舞われるなど、参加者は潮風を感じながら楽しいひとときを過ごしました。